

水文化は観光の未来を拓くか
～アクアツーリズムと次世代ツーリズム～
北海道大学教授 石森 秀三

みなさん、こんにちは。只今ご紹介に預かりました北海道大学の石森でございます。本日は、ミツカン水の文化交流フォーラムにお招きに預かりましたことを、大変光栄に存じております。先程、塚崎専務のお話にありましたように、ミツカン水の文化センターは 1999 年に設立されたということですが、私も常日頃から機関誌等を通して、大変素晴らしい活動をされていると評価させていただいておりました。今年「日本水大賞 厚生労働大臣賞」を受賞され、おめでとうございます。私もこのフォーラムに一度参加したいと思っておりまして、ようやく念願が叶いまして、今回お招きに預かったところであります。

今回は、アクアツーリズムがテーマです。このアクアツーリズム、水の観光であります。また世界的にも十分にコンセプトとして定着したものではありませんので、ミツカン水の文化センターが今後大いに広めて頂きたいと思ひますし、私も観光学の立場で大いに活用していきたいと思ひております。

観光立国と観光学の発展

小泉純一郎元首相によって、観光立国が始めて唱えられまして、日本でも観光が国家的課題になりました。2003 年に、彼が内閣総理大臣の時に観光立国を突然提唱されまして、私も観光立国懇談会のメンバーに選ばれまして、小泉首相、当時の福田内閣官房長官、安倍晋三官房副長官と官邸で会議に同席しました。

これまで日本では、観光で国が成り立つ筈が無い、観光で地域が成り立つ筈がないと思われていた訳ですが、小泉首相によって初めて観光が国家的課題として認知されるようになりました。

北海道大学に 2006 年 4 月に観光学高等研究センターが初めて設立され、翌 2007 年 4 月に独立の大学院で観光創造専攻が設置されました。2004 年の 3 月の段階で日本全国に約 100 の国立大学がありましたが、そのどこにも観光学部も観光学科も、観光学コースも講座も、観光学の大学院も観光学の研究センターもありませんでした。日本の学界は、観光など取るに足らないものであると、少なくとも国立大学は見なしていました。そして旧七帝大のひとつである北海道大学も、勿論観光を無視して来た訳であります。それが観光立国の時代において、ようやく北海道大学にも、日本で唯一の観光学の高等研究センター、そして観光学の大学院が置かれるようになりました。

今日は、アクアツーリズムと次世代ツーリズムがテーマです。今私どもの北海道大学観光学高等研究センターが重点的に研究を始めていますテーマは、「次世代ツーリズムの研究」であります。アクアツーリズムを観光変動の中でどう位置付けていくかについて、少し皆様方にお話させていただきます。

観光をめぐる地殻変動

観光は今、大きな地殻変動の時代を迎えています。

日本で観光が大衆化したのは、1960 年代でした。日本が高度経済成長を遂げていくなかで、

マストゥリズムという誰にでも観光旅行が可能な時代が到来しました。それは一言で言えば、「他律的観光」であります。他律的観光とは、例えば旅行者にとっては他者が主導する観光のあり方です。そういうあり方を「他律的観光」と私は名づけました。

1990年代に入りますと、ニュートゥリズムという動きが出てきました。こういった動きを私は、今から15～6年前に、「自律的観光の時代」が始まったと言いました。例えば神戸に住む人が北海道を旅行する際には、以前には間違いなく、旅行会社のオフィスに飛び込みました。そうして「北海道へ行きたいんだけど、どんなパッケージ旅行商品があるか」と聞き、いくつかの旅行商品の中から自分の可処分所得、可処分時間に見合うものを選ぶというのが他律的観光でありました。

しかし90年代以降、バブル経済が弾け、インターネット革命が起こる中で、旅行者自らが旅行会社に頼らずに、インターネットによって様々な情報にアクセスし、予約もインターネットを通して行える、必ずしも旅行会社に頼らずに旅人が自ら旅をオーガナイズできる時代がやって来たのです。これは旅人だけの問題ではなく、地域の側も90年代以前、自分の町を観光で成り立たせるためには、やや極論の表現になりますが、旅行会社や観光開発会社に、「何とかわが町を観光地にしてください」という媚び諂いをして、日本では観光地開発がなされてきました。

しかし90年代以降、旅人が自分で動き出したから、地域の側も自律的に、旅行会社や観光開発会社に頼らなくても、自らの地域の資源を持続可能な形で活用するなかで、自分で動き始めた観光者を自律的に引き込んでいくこと、引きつけていくことが出来る時代がやって来たのです。

そういうなかで、私達は今、次世代トゥリズムの研究に着手しています。私は2010年代に観光を巡る大きな変化が起こるという予測を今から15～6年前にたてております。そういう次世代トゥリズムの時代が今始まろうとしているという訳であります。

マストゥリズムとニュートゥリズム

1960年代に始まった、マストゥリズムとしてのアクアトゥリズムは、典型的には温泉観光という形で立ち上がりました。1960年代以降に温泉観光地は、日本全国おしなべて非常に隆盛化しました。言うまでもなく、ある種の他律的観光の最も極みでありまして、団体に数多くの観光地を巡る周遊する場合に、必ず訪れる場所として温泉観光地が選ばれ、そしてある種の囲い込み観光が行われ、ホテルの装置がより巨大化しました。ところが今現在ほどこも巨大化したホテルを維持することが困難な時代を迎え、多くの温泉観光地において倒産が起こる時代が来ています。

そういう意味で90年代以降、バブルが弾け、観光のあり方が変わるなかで、「自律的観光」へシフトするなかで、アクアトゥリズムとしての温泉が衰退期に入りました。

こうした状況において、既にニュートゥリズムとしてのアクアトゥリズムが、様々なかたちで起こっています。例えば、温泉を使うのであっても単なる温泉観光ではなくてヘルシートゥリズムが重要になっています。要するに健康のために、温泉を利用することが、今日本の各地で行われています。またタラソテラピーという、海水を利用した健康療法もありますし、エコトゥリズムという自然環境との絡みでアクアトゥリズムを活用するところもあります。グリーントゥリズムという農村地域における観光を考えるなかでもアクアトゥリズムが起こっています。最近では、ジオパークがユネスコの支援で登録が進められる中で、世界的に、また日本でもジオトゥリズムが盛んになって来ています。北海道は、洞

爺湖有珠山ジオパークが「世界ジオパーク」に登録されて、まさにアクアツーリズムに関わるところで、ジオツーリズムの動きが起こって来ています。

アクアツーリズムと地域づくりの問題も大変重要です。水文化を活用した地域づくりとしてはすでに柳川であるとか、松江、飛騨、ニセコ、近江八幡であるとか、日本のさまざまなか所で、水文化を活用した地域づくりとの絡みでのアクアツーリズムが盛んになっています。また、アウトドア・アクティビティの面でも、アクアツーリズムが重要になっています。沖縄であればダイビングが非常に重要ですし、ニセコであれば夏のラフティングも重要です。また水上町ではキャニオニング(急流下り)もアクアツーリズムというかたちで、特にアウトドア・アクティビティとの絡みで重要性を持ってきています。

さらに簡単にマスツーリズムとニューツーリズムを比較しますと、マスツーリズムは1960年代以降盛んになりましたが、これは基本的に旅行会社と観光開発会社が主導し、成長社会における「発地型」の観光であり、形態としては団体旅行、名所見物、周遊型の観光でした。けれども、90年代以降のニューツーリズムは、官主導、要するに霞ヶ関主導で提唱されまして、地域社会がその受け手になっています。例えば1992年頃にバブル経済が弾けてリゾート開発が破綻した時に、農林水産省が真っ先に農村観光を提唱して、リゾート開発でズタズタになった農村地域に補助金をつくってグリーンツーリズムを盛んにしようとした。これはニューツーリズムのひとつのかたちです。低成長社会における「着地型観光」、形態とすれば非団体、参加体験重視の、そして周遊ではなくて1箇所滞在型という新しい観光のあり方が、90年代以降重要になっています。しかし基本的には霞ヶ関が予算をつけて、地域が補助金を受けて動かそうとしているツーリズムのあり方であります。

成熟社会化への対応

そういうなかで私どもの北海道大学は次世代ツーリズムの研究に着手しています。次世代ツーリズムを考える時に一番重要なキーになりますのが、「観光は勝手に変わるものではない」ということです。「観光が変わる」「観光を変える」ためには、言うまでもなくライフスタイル・イノベーションが必要です。人々の生き方、暮らし方を変えていかないと、観光のあり方も当然変わっていきません。

今、日本は成熟社会化の方向に向かっていますが、そういったなかで当然日本人の生き方も変わっていかねばならない。日本では既に、自然環境が破壊され尽くしていますが、それだけではなく、人の体内環境も破綻しています。要するに免疫システムが破綻しています。何故、花粉症が国民的病になるのか。何故さまざまなアレルギーが国民的病になるのか。人間の体内に本来備わった体内環境、免疫システムが既に破綻をきたしているからです。

しかし自然が破壊され、人々の体内環境の免疫システムが不調になっておしまいではありません。今日本人が深刻に悩むべきは、人の心そのものが破綻をきたして来ていることです。日々、新聞やテレビのニュース等々で我々が目にするまったく信じられない、2~30年前ではありえないような、「本当に行きずりで、誰でも良かった」、「とりあえず殺したかった」、「リセットボタンを押せばまた蘇るんじゃないの」というぐらい、罪の意識がない日本人が急激に増えてきている。こういうボディ(からだ)、マインド(こころ)、スピリット(たましい)という本来我々の中に備わっているものが、もうすでに様々なかたちでバラバラにされている。

水文化やアクアツーリズムを通して、本来の人間のあり方に一体化できないかと考えています。そ

のためには、有給休暇完全取得法(仮称)をつくることです。今、労働者の権利である有給休暇を完全に取得している人は、日本ではほとんどいません。昨年の有給休暇の取得率は46%であり、54%の有給休暇が、労働者の権利であるにも関わらず取得されていないのです。

国際財務報告基準(IFRS)に基づく、有給休暇を完全に取得できていない社員に対しては、企業はそれを負債として計上し、お金で弁済をしなくてはなりません。このシステムは、今後日本でも導入されていきます。自由時間こそもっと大切にされるべきであり、有給休暇の完全取得法という法律が整備されるならば、人々がたくさんの自由時間をもって、例えばアクアツーリズムを通して人間の生き方そのものを変えていくチャンスになっていくことを期待しています。次世代ツーリズムとは、そういう人間が自らの暮らし方を変えていくことに貢献できるような観光のあり方を想定しております。日本人はもっと人生を楽しまなければいけないと、私は思っています。

人生を楽しむことで内需拡大が起こり、日本経済に1つの大きな活力を与えるということが、様々な研究で既に証明されています。

日本は長らく、国民総生産(GNP)をいかに高めるか、そのための経済成長に力点を置いてきました。しかしブータン王国はそうは考えていません。ブータン王国の国王は、GNHを提唱しています。“H”は、“ハピネス”を意味し、「国民総幸福」の意味です。国民の幸せをいかに守り抜くかが、国の重要な国家デザインの中心にすえられるべきと考えられています。

ワーク・ライフ・バランス。仕事も大切である。しかしそれと同様に自らの持つ自由時間をより大切にするなかで、人生を見直す必要があります。成熟社会における新しいライフスタイルの創造。食・住・遊・学・健・美にかかわるライフスタイル・イノベーション。そういう変化を起こすライフスタイル起業家が、欧米では既に大変重要な役割を果たしています。

グリーン化(低炭素化)への対応シナリオ

今後世界的にグリーン化(低炭素化)が国家的課題になります。鳩山首相は国連総会で、2020年までに25%の低炭素化を目指していくことを提唱しました。

国立環境研究所は幾つかの大学とともに共同研究を行って、日本における低炭素社会の実現のためのシナリオを提言しました。それには、シナリオAとシナリオBがあります。

シナリオAは、現在の日本の進んでいる方向性でありまして、経済発展を望み、高い技術進歩が大切を考える。その結果としてどういうことが起こるか。都市部へ人口と資本が集中し、地方都市の人口の大幅減、地方における過疎化の進展、消費が旺盛、買い替えサイクルが短い。仕事時間が長く、原子力に力点を置く、エネルギー集約型の社会へと向かっていく。要するにアーバン・ライフ(都会暮らし)志向の日本人が増えていくというシナリオです。

それに対しシナリオBは、経済発展よりも生活重視を考える人が増えていく、というものです。技術進歩はそれほど高くなくてもいいと考える人が増えていく。市場における適度な規制緩和が必要であり、その結果として第一次産業、農林水産業が復権する可能性がある。ゆとり志向、ライフスタイルを重視する人が増え、都市部から農村部への人口移動が顕著に起こってくる。その結果として、大都市郊外から地方の農山村への移住が起こり、活気のある地方都市の出現、住民参加による理想の地域づくりが進展していくのではないかと。

要するに、現在ヨーロッパで既に実現されている方向に、日本も向かっていく可能性があるということです。歩いて暮らせるまちづくり、“もったいない精神”の浸透、自由時間の重視、自然エネルギーを重視する分散型の社会になっていくのではないかと。要するにグリーンライフ(田園暮らし)を望む日本人が今後急激に増えていく、というのがシナリオBです。

今後の日本においては、都市にあくまでも重点を置く日本人の暮らしの一方で、大都市を離れて田園部でグリーンライフのもとで生きていこうとする日本人が増えるのではないかとという2つの異なるライフスタイルが予測されている訳です。

そこで私ども北海道大学が研究しておりますのは、セカンドホーム・ツーリズムです。都市部に住んでいる人が、週末にグリーンライフを求めて二地域居住をしたり、セカンドホーム・ツーリズムをしたりする。

例えばスウェーデンの場合、全所帯の18%がセカンドホームを持っています。アメリカの場合でも、15%の所帯がセカンドホームを持っています。大都市圏で仕事をしながら、週末には必ずセカンドホームに戻って、セカンドホーム・ツーリズムを通してリフレッシュを繰り返す。そういう日本人が今後増えていくのではないかと予測しています。

次世代ツーリズムへの期待

新しいライフスタイルを求めて、アメニティ・ムーバー、心地良さを求めて動いていく人が増える可能性があります。次世代ツーリズムの諸条件とは何でしょうか。マストツーリズムでは、旅行会社や観光開発会社が主役となって動かしていました。それに対してニューツーリズムは、政府と自治体、地域社会が中心になって動かそうとしています。それに対して私どもが研究しています次世代ツーリズムは、明らかに旅人自らが生み出していく観光の新しい姿であり、成熟社会におけるライフスタイル・ツーリズム、ウェルネス・ツーリズム、ウェルフェア・ツーリズムなどが挙げられます。

特に新時代のライフスタイルとして、豊かな水文化を育むグリーンライフが非常に重要になってきます。「水の文化」は本当に素晴らしい機関誌ですが、この機関誌の中でも、様々な水文化が育む豊かなグリーンライフが取り上げられています。そういうグリーンライフを求めて、グリーンライフ・ツーリズムがより盛んになっていく可能性もありますし、大都市にいながらグリーンライフを求めるセカンドホーム・ツーリズムが盛んになる可能性が高い。

最後に、私は今、次世代ツーリズムを考えるなかで、人生の問題を突き詰めようとしています。今後は観光を通して、それぞれの人が人生を考えていく時代になっていくのではないかと。既にこのミヅカン水の文化センターでは、「水を眺める」「水を聞く」「水を清める」ということが人間の精神を安定させ、潤いのある生活を営むうえで水文化は欠くことが出来ないと主張しています。アクアツーリズムというのは、まさに「水を眺め」「水を聞き」「水を清める」ことであり、アクアツーリズムを通して、自らの人生を考えることのできるツーリズムのあり方です。私は今、発光(光をひらく)ということに注目しています、それぞれの人間が内に秘めています光を、観光を通して自らがひらくという観光は、あり得ないのでしょうか。

例えば人は、何故スキューバ・ダイビングが好きなのか。何故サーフィンが、何故キャニオニングが、何故ラフティングが好きなのか。水は、注意を怠ると本当に危険なものですから、アクアツーリズムに

集中して、ディープフローし、エクスタシーをするなかで、ふと自分にとっても一番大切なものに気付くことがあるはずでず。アクアツーリズムには、そういう面があるのではないか。もちろん温泉や水文化を通しての安らぎもありますが、アクアツーリズムを通して日常では自らが気付かない光に気付くことができるような次世代ツーリズムを、今後考えていく必要があると考えています。

最後にアクアツーリズムと危機管理について少しふれます。それは、リスク・マネジメントの問題です。アクアツーリズムにおいて、人生を考えるほど集中する、のめりこむ。それはひとつ間違ると、命に関わる面があります。今後アクアツーリズムを考える時に、リスク・マネジメントという問題が出てきます。これは日本が非常に弱いところだす。この前、北海道でも山で8人の人が亡くなりました。あれは、ガイドの方だけの責任ではなくて、そういう危険が伴うツーリズムについて、きちんとしたガイド資格認定制度が必要でありますし、人材育成が必要であるとともに、ツアーの企画・運営を含めたリスク・マネジメントが不可欠だす。

ご清聴を賜りましたことを、厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。